

宋詩における曹植・丕詩の影響について

——陸游の詩を中心として——

上野裕人

はじめに

南宋の陸游（一一二五～一二一〇、字は務観、号は放翁）は、南宋最大の詩人とされる。彼は自然の美しさや憂国の情などを詠い、彼の詩集『劍南詩稿』には約九千二百首の作品が残されている。その他の著には『入蜀記』・『老学庵筆記』などがある。拙論では、陸游の詩における表現や構成に、三国時代の魏の曹植（一九二～二三二）や曹丕（一八七～二二六）の詩がどのような影響を与えているかについて考察していきたい。

一 「本根」及び「転蓬」・「断蓬」の詩語について

陸游には「山南行」という七言十六句から成る楽府体の七言古詩がある。その詩の最後の句に「本根」という詩語が見られる。引用するのは第十三句目から第十六句目である。

國家四紀失中原
師出江淮未易吞
會看金鼓從天下
却用關中作本根

國家 四紀 中原を失ふ
師 江淮に出づれば未だ吞むに易からず
會看 金鼓の天より下るを看んとせば
却つて関中を用つて本根と作せ

この詩が作られた時、淮河以北は金軍によって占領されており、この江淮地方では実際に金と南宋との戦闘が展開されていた。陸游は、広い江淮地方に出兵しても金軍を一網打尽にはできないと考え、関中すなわち函谷関以西を本拠地として固めようと進言した。ここに用いられている「本根」は、曹植の「吁嗟篇」に見られる。曹植の詩は四言二十四句から成るが、引用するのは第一句目から第六句目である。

吁嗟此轉蓬 吁嗟 此の転蓬

居世何獨然 世に居る何ぞ独り然るや

長去本根逝 長く本根を去りて逝き

夙夜無休閒 夙夜 休閒無し

東西經七陌 東西 七陌を経

南北越九阡 南北 九阡を越ゆ

この詩は、兄の曹丕によってたびたび領地換えを強制された曹植が、転蓬に託して流浪する我が身を嘆いた詩である。「本根」とは転蓬になる前に地面に生えていた根である。さらに曹植の「雑詩六首」其二にも「本根」が使われている。引用するのは、五言十二句から成る詩の第一・二句目である。

轉蓬離本根 転蓬は本根を離れ

飄飄隨長風　飄飄として長風に随ふ

ここでも「本根」は風に吹き飛ばされ転がってゆく蓬のものと根を指している。陸游の詩では、一一二六年に金軍が侵入して北宋が滅ばされてから、すでに四十八年が経過し、北宋の都汴京も含まれる中原を失った以上、陝西を本拠地にすっかり根を生やせと訴えたのである。まず長安を奪回し、これを拠点として金軍に向かって出撃せよと主張する。曹植詩の「本根」も、蓬が長い旅に出る最初の出発点を意味することから、ここから遠征せよとする陸游詩は、曹植詩を念頭に置いていると考えられる。

また、陸游には「懷舊」と題する七律があるが、そこにも「蓬」が描写されている。引用するのは、その中の首連である。

身是人間一斷蓬　身は是れ人間のじんかんの一断蓬

半生南北任秋風　半生　南北　秋風に任す

この詩に用いられている「人間」という詩語は、曹植詩「吁嗟篇」の「世に居る」と対応する。「断蓬」は根から断ち切られた蓬であり、秋風に吹かれ丸くなつて転がる様子が、ふらふらと定めない人生の比喩として使われている。また、陸游詩の二句目の「半生　南北　秋風に任す」についても、曹植詩「吁嗟篇」の「長く本根を去りて逝き／夙夜　休閒無し／東西七陌を経／南北　九阡を越ゆ」からの影響を受けていると考えられる。

さらに、陸游の「晚泊」と題する七律にも「轉蓬」が用いられている。引用するのは首連である。

半生無歸似轉蓬　半生帰る無く転蓬に似たり

今年作夢到巴東　今年夢を作して巴東に到る

陸游はこの時、遠い四川省の任地を目指す旅の途上にあった。この詩でも、故郷紹興を離れ、中国を横断する旅を続ける自分を「転蓬」に例えている。

もう一例をあげれば、「貧甚、戲作絶句」八首という八十一歳の時の七絶にも用いられている。引用するのは第七首の起句と承句である。

行徧天涯等斷蓬　行いて天涯に徧あまねきこと断蓬に等し

作詩博得一生窮　詩を作りて博かち得たり一生の窮

晩年近くになった陸游は、自分の一生を振り返り、天の果てまで巡り歩いた私の人生は、根から断ち切れた蓬のようであると嘆いた。その上、地位や名誉に目もくれず、詩作にばかり熱中した結果、一生貧乏暮らしで終わることになったと人生を回想する。ここにも、曹植詩に使われている「断蓬」という詩語が用いられている。

二 「戦死士所有・恥復守妻孥」と「性命安可懷・何言子與妻」の表現について

陸游には「夜読兵書」という十二句からなる五言古詩がある。その中に次の表現が見られる。引用するのは、第三句目から第六句目である。

平成萬里心　平成　万里の心

執戈王前驅 戈を執つて王の前駆たらん

戰死士所有 戰死は士の有る所

恥復守妻孥 復た妻孥さいとを守るを恥づ

この詩では、「日頃から万里の辺境を馬で駆け回る志を持っていて、戈を構え我が君の馬前を走ろうと思つてきた。男子は戦場で死ぬのが当たり前なのに、妻子を大事に守っているばかりなのは恥ずかしいことだ」と詠っている。陸游はこの時、科挙を受験し一次試験である解試は首席で通過できたものの、本試験の省試では、講和派だった宰相秦檜（一〇九〇～一一五五）の干渉により落第させられ、失意のうちに故郷に戻つていた。この陸游の慷慨の気持ちと同じ心情を曹植も「白馬篇」の中で詠っている。この詩は五言二十八句から成る長篇の詩であるが、引用するのは第十七句目から第二十八句目である。（注）

羽檄從北來 羽檄北より来たれば

厲馬登高堤 馬を厲はげまして高堤に登る

長驅蹈匈奴 長驅して匈奴を踏み

左顧凌鮮卑 左に顧みて鮮卑を凌ぐ

弃身鋒刃端 身を鋒刃の端にすつ

性命安可懷 性命安んぞ懷ふべけん

父母且不顧 父母すら且つ顧みず

何言子與妻 何ぞ子と妻とを言はん

名編壯士籍 名は壯士の籍に編せらる

不得中顧私 中に私を顧みるを得ず

捐軀赴國難 軀を捐てて國難に赴く

視死忽如歸 死を視ること忽ち歸するが如し

この曹植詩では、馬に乗った勇士がまっすぐ駆け抜け匈奴を踏み散らし、命すら惜しまず、父母でさえ顧みないのに、どうして妻子のことを口にしようかと詠っている。陸游詩でも、戦死は当たり前だと思つているのに、戦さから離れ故郷で兵法書など読みながら、妻子を守つて暮らすのは恥だとしている。この陸游詩は、曹植の「白馬篇」を念頭におき、その勇者の姿勢を自分が理想とする生き方として表現したのではないだろうか。

三 「春波緑」・「緑波」及び「驚鴻」の詩句について

陸游には、最初の妻であり今は亡き唐婉を想つて作つた「沈園二首」という詩がある。二首とも五絶であるが、引用するのは第一首の全文である。

城上斜陽畫角哀 城上の斜陽 画角哀し

沈園非復舊池臺 沈園 復た旧池台に非ず

傷心橋下春波綠 傷心す橋下の春波緑なるに

曾是驚鴻照影來 曾是是れ驚鴻の影を照うつり来たる

この詩を作った時、陸游は七十五歳であつた。三十一歳の時にこの沈園を訪れたところ、母のために離縁させられた唐婉と偶然に出会つた。その思い出深い地を再訪した時の作品である。この詩の転句に描かれる「春波緑なるに」という詩句は、曹植の「公讌」第八・九句目にある「朱華は緑池を冒おほふ／潜魚 清波に踊り」のイメージを踏襲していると考えられる。この詩は

五言十五句からなるが、引用するのは第七句目から第十句目である。

秋蘭被長坂 秋蘭は長坂に被り

朱華冒綠池 朱華は綠池を冒ふ

潛魚躍清波 潛魚 清波に躍り

好鳥鳴高枝 好鳥 高枝に鳴く

また、曹丕の「於玄武陂作」にも類似した句がある。引用するのは五言十六句からなる詩のうちの第五句目から第八句目である。

黍稷何鬱鬱 黍稷 何ぞ鬱鬱たる

流波激悲聲 流波 激して悲声あり

菱芡覆綠水 菱芡 綠水を覆ひ

芙蓉發丹榮 芙蓉 丹榮を發す

この詩は、曹丕が曹植たち兄弟と共に野遊びをした時の様子を詠っている。玄武池に流れ込む波（流波）は激しく悲しい声をあげ、菱芡は綠色の水（綠水）を覆っており、蓮の花が赤く鮮やかに咲く玄武池の豊かな自然を描写している。綠色の水には、赤い色の花が好く映え、曹植詩でも「朱華は綠池を冒ふ」と一句の中で対比させるが、陸游詩では「春波」が「緑なるに」と描くのみで花の描写はなされていない。おそらく曹植詩や曹丕詩のように大勢で楽しく遊ぶ雰囲気とは違い、悲しみを強調するためにあえてそうしたのであろう。

さらに、これは詩ではないが、曹植の「洛神賦」にも同じような表現が見られる。

遠而望之、皎若太陽升朝霞。迫而察之、灼若芙蓉出綠波。

遠くして之を望めば、皎かにして太陽の朝霞に升るが若し。迫りて之を察れば、灼きて芙蓉の綠波を出づるが若し。

この賦は、曹植が都からの帰りに、洛水の水辺で甄逸の娘の幻に出会った時の様子を描写したものである。甄逸の娘は、曹植がかつて愛した女性だったが、曹操によって兄の曹丕に与えられてしまう。さらに、讒言のために彼女は死を賜ったのである。陸游詩にある「傷心す橋下の春波緑なるに」の句は、「洛神賦」の「迫りて之を察れば、灼きて芙蓉の綠波を出づるが若し」の句からの影響があると考えられる。また陸游詩の「城上の斜陽」では、太陽が沈む様子を描写しており、「洛神賦」では、女神の様子を「太陽の朝霞に升るが若し」と太陽が昇る例えが用いられている。「太陽が沈む」と「太陽が昇る」と反対の表現になっているが、この句も「洛神賦」と効果的に対比させた表現と考えられる。さらに転句に続く結句では、「曾て是れ驚鴻の影を照し來たる」と描写されている。この句も「洛神賦」に同等の表現が見られる。

其形也、翩若驚鴻、婉若遊龍。榮曜秋菊、華茂春松。髣髴兮若輕雲之蔽月。飄飄兮若 流風之迴雪。

其の形や、翩たること驚鴻の若く、婉たること遊龍の若し。榮は秋菊よりも曜き、華は春松よりも茂る。髣髴たること輕雲の月を蔽ふが若く、飄飄たること流風の雪を迴すが若し。

この「洛神賦」に描写された「驚鴻」というのは、水面をけつて飛び立ってゆく鴻の姿を例えにして、洛神の女神が波の上を軽やかに歩く様子を詠っている。陸游詩でもこの「驚鴻」を効果的に用いて、しかも「影」という語を組み合わせて用いることにより、自分の手からこぼれ落ちる砂のように、はかなげで実体感の無い様子が効果的に表現されている。日本の詩で例えるなら、中原中也の「一つのメルヘン」のイメージであろうか。引用するのは四連からなる詩の三連と四連である。^(注)

さて小石の上に、今しも一つの蝶がとまり、

淡い、それでゐてくつきりとした

影を落としてゐるのです。

やがてその蝶がみえなくなると、いつのまにか、

今迄流れてもゐなかつた川床に、水は

さらさらと、さらさらと流れてゐるのでありました……

この「蝶」は、決して自分の手にとることはできない。もし手中に収めることができたとしても、途端に蝶は、その繊細さ故に現実の重しによつて握りつぶされてしまっただろう。実際に陸游が愛した唐琬は、姑との確執によつて家を出されてしまったのである。こうした背景も、曹植が好意を持ちながら添い遂げられなかつた甄逸の娘との悲恋に類似しており、陸游は悲恋を詠つたこれまでの表現から、「驚鴻の影」という詩語を考え抜いたのであろう。この詩語を用いることにより、「洛神賦」が持つ全体の憂愁のイメージを自詩の中に取り込むことに成功

している。起句で「画角哀し」と詠い、承句で「旧池台に非ず」と時間がもとに戻らぬことを嘆き、転句で「傷心す」と悲しみを畳みかけ、結句の「驚鴻の影」においては、「洛神賦」全体が持つ悲哀の感情を読者の脳裏に呼び覚まさせることにより、作者の深い悲しみを切々と訴えているのである。

四 「鬪鷄走馬宴平樂」の表現について

陸游には「長歌行」という作品があり、同題のものが五篇あるが、この詩は五十五歳の時の作である。引用するのは楽府体十六句のうち第三句目から第十六句目である。

既不能短衣射虎在南山

既に短衣 射虎 南山に在ること能はず

又不能鬪鷄走馬宴平樂

又 鬪鷄 走馬 平樂に宴すること能はず

惟有釣船差易具

惟だ釣船の差具し易き有り

問君胡爲不歸去

君に問ふ胡爲ぞ帰去らざる

片雲雨暗玉笥峯

片雲 雨は暗し玉笥の峯

斜日人爭石旗渡

斜日 人爭ふ石旗の渡

渡頭酒壚堪醉眠

渡頭の酒壚は 醉眠に堪へたり

白酒醇醖鱸魚鮮

白酒は醇醖にして鱸魚鮮かなり

菰米如珠炊正熟

菰米は珠の如くして正に炊熟す

蓴羹似酪不論錢

蓴羹は酪に似て錢を論ぜず

翁唱菱歌兒舞櫂

翁は菱歌を唱ひ 兒は櫂を舞はず

醉耳 那知朝市鬧 醉耳 那ぞ知らんや朝市の鬧しきを

城門幾度送迎官 城門は幾度か官を送迎するも

睡擁亂衰呼未覺 睡りて乱衰を擁して呼べども未だ覺めず

この詩の第四句目にある「又 鬪鶏 走馬 平楽に宴する」と能はず」の詩句は、曹植の「名都篇」から採られている。この詩は五言二十八句からなる長篇であるが、引用するのは第五・六目と第十七・十八句目である。

鬪鶏東郊道 鶏を東郊の道に鬪はし

走馬長楸間 馬を長楸の間に走らす

・ ・ ・ ・ ・

歸來宴平樂 歸り來つて平楽に宴す

美酒斗十千 美酒 斗十千

曹植詩は、都の若者が鬪鶏をしたり、街路樹の植えられている街の大通りを馬で疾駆したり、（狩りをして）帰つて来れば平楽殿で高価な酒に酔いしれる遊興の様を詠っている。陸游は「長歌行」の中に、曹植の詩句をほぼそのまま取り入れている。ただ陸游詩では、若い時にはそうした楽しみもあったが、すでに歳を重ねた今、そうした生活はできないという悲哀が詠われている。

さて、陸游は詩を作る際に、どのような態度で詩作に励んだのだろうか。そのヒントになる詩がある。それは、我が子に作詩の方法を教えた「示児」という詩である。同題の詩は、八十五歳晩年の辞世の詩となったものも含めて複数あるが、引用するのは六十八歳の時に作られた七絶の起句と承句である。

文能換骨餘無法 文は能く骨を換ふ 余に法無し
學但窮源自不疑 學は但源を窮めて 自ら疑はず

この詩の起句で彼は、「文学の方法は昔の人の作品を学んで、骨を入れ換えればよいのであって他に方法はない」と主張している。その視点から「長歌行」を考察すれば、確かに様々な詩人の詩句を組み合わせることにによって作られていることがわかる。第三句目の「既に短衣 射虎 南山に在ること能はず」の詩句は、杜甫（七一二～七七〇）の「曲江三章 章五句」から採られている。この詩は三章あつて、それぞれが七言の五句ずつから構成されている。引用するのは第三章の第三句目から第五句目である。

故將移住南山邊 故に將に南山の辺に移住し

短衣匹马隨李廣 短衣 匹马 李広に随ひ

看射猛虎終殘年 猛虎を射るを看て殘年を終へんとす

杜詩は、まさに「南山・短衣・射猛虎」の組み合わせであり、陸游詩は、そのまま杜甫の詩から採っていることがわかる。また、六句目の「君に問ふ胡爲ぞ歸去らざる」の句は、陶潜（三六五～四二七）の「飲酒」と「歸去來辭」から採られている。引用するのは「飲酒」五首の第三句目である。

問君何能爾 君に問ふ何ぞ能く爾るやと

次に引用するのも、陶潜の「歸去來辭」の第一・二句目である。歸去來兮。田園將蕪胡不歸。歸去りなんいざ。田園將に蕪れなんとす胡ぞ歸らざる。

陸游詩では、「飲酒」の前半部分「君に問ふ」と、「歸去來辭」

の第二句目の「胡ぞ帰らざる」とを組み合わせて用いている。この有名な詩句を自詩に取り入れることにより、陶潜が官を辞して悠々自適の生活を楽しんだ心情を表現している。さらに、第十句目の「鱸魚鮮かなり」は、鱸の刺身と蓴菜の吸物が食べなくなったと言って官を辞して故郷に帰ってしまった張翰の故事を引用して、やはり官職にとられない自由人の気持ちを表現している。また、第九句目の「渡頭の酒壚は 醉眠に堪へたり」と、第十四句目、第十六句目の「醉耳く呼べども未だ覚めず」は、陸游自身のことを詠うが、杜甫の「飲中八仙歌」七言二十二句中で、李白（七〇一―七六二）について述べた第十四句目から第十七句目の

李白一斗詩百篇

李白は一斗詩百篇

長安市上酒家眠

長安市上 酒家に眠る

天子呼來不上船

天子呼び来れども船に上らず

自稱臣是酒中仙

自ら称す臣は是れ酒中の仙と

に描かれる表現から影響を受けていると思われる。ここでも、自由奔放に生きる李白の故事を取り入れることにより、「束縛されない自由気ままな生活こそ真の理想と言えるのだ」と主張しているようだ。こうした手法は、例えば、地質学というと礫岩（conglomerate）という岩石に似ているかもしれない。この岩石は、地球上に散らばった様々な岩石の破片が、粘土や石灰や珪酸などによって固結されてできている。先に掲げた「示兒」の中で陸游は「先人の作品から巧みな表現を取り入れよ」と述べた。それはあたかも礫岩という堆積岩が、ばらばらになっ

た多くの種類の岩石を取り込み、それを固結させることによって岩石を作り出していくことと似ている。詩人の腕の見せ所は、どのような種類の詩句を選び、どのように組み合わせ構成し一篇にまとめるかに尽きる。確かに「長歌行」の構成だけを見れば、そうした見方ができそうである。しかし、五十五歳から二十九年後の陸游八十四歳の時に、末子の子逸に与えた詩を見ると、この考え方には変化が現れていることが認められる。引用するのは五言十六句からなる五言古詩「示子逸」のうち、第一句目から第四句目までと第十三句目から第十六句目である。

我初學詩日

我初めて詩を学びし日

但欲工藻繪

但だ藻繪に工みならんと欲す

中年始少悟

中年 始めて少しく悟り

漸若窺宏大

漸く宏大を窺ひしが若し

・ ・ ・ ・ ・

詩爲六藝一

詩は六芸の一為り

豈用資狡獪

豈用て狡獪に資せんや

汝果欲學詩

汝果して詩を學ばんと欲せば

工夫在詩外

工夫は詩外に在り

ここでは、「詩を勉強し始めたばかりの頃は修辭の美しさに上達しようとしていたが、中年になって少しだけ気づき、宏大な詩の境地をのぞき見することができた。……詩は六芸の一つであり遊びにして良いはずがない。お前が詩を勉強したいと思うなら、努力すべきは詩作技術の他にある」と主張する。詩作技術以外のものとは、一体何を指しているのだろうか。それは、

技巧ではなく、人間としての根本的な生き方を指しているのではないか。

五 「此身合是詩人未」の表現について

先に述べたように、陸游は末子の子逸に、詩を勉強するなら「工夫は詩外に在り」と諭した。詩の形に表れなくとも、自己の生き方からにじみ出る詩の根底に流れる精神とでもいうべきものだろうか。それは、先人の詩句を引用するのではなく、先人の志そのものを引き継ぐものかも知れない。引用するのは、「劍門道中遇微雨」と題する七絶の全文である。

衣上征塵雜酒痕 衣上の征塵 酒痕を雜ふ

遠遊無處不消魂 遠遊 処として消魂せざるは無し

此身合是詩人未 此の身 合に是れ詩人なるべきや未や

細雨騎驢入劍門 細雨 驢に騎つて劍門に入る

陸游はこの詩を作った時、長年望んでいた政治家として官軍を統率し、金軍を破って失地を取り戻すという願いが叶わなくなり、失意のどん底にあった。第三句目にある「此の身合に是れ詩人なるべきや未や」という詩句に、陸游の迷いと決意の二つが込められているようだ。すでに金軍と戦えなくなつた今、残されているのは慷慨を詠う詩人になる他はないのかと嘆じている。次に引用するのは詩ではなく手紙であるが、曹植は「與楊德祖書」で次のように述べている。

猶ほ庶幾はくは力を上国に勸せ、恵みを下民に流し、永世

の業を建て金石の功を留めんことを。豈徒に翰墨を以て勲績を為し、辭賦を以て君子と為さんや。若し吾が志未だ果たされず、吾が道行はれずんば、則ち將に庶官の実録を采り、時俗の得失を論じ、仁義の衷を定め、一家の言を成さんとす。

この手紙の中で、曹植は永遠の業績を残し、金石にも刻まれる手柄を立てたいと念願し、もしそれができないならば、一家の言を書き記したいと述べている。この手紙を書いた時、二十五歳だった曹植は、政治家・軍人として功績をあげたいと考えており、どうして辭賦くらいのことと自分が君子だと思つたりしようとした。しかし、その志が果たされないなら、文人として生きたいとも考えていた。陸游も若い時から、金軍と対戦して失地を奪回したいと願う主戦論者であつた。この「劍門」詩の第三句目には、陸游の一生の生き方を占う詩識が込められている。この曹植の手紙と陸游詩との関係を、再び地質学で例えるなら、先述の堆積岩ではなく、火成岩である花崗岩（granite）が、材料となつた岩石が高温の熔岩になり元の形が無くなるまで溶融して、再び鉱物が結晶して生成されることに例えられる。元の詩句や文が一つも引用されなくても、先人が発する精神や生き方が内包されていると言える。詩を読むことは、その詩を通し先人の人生を体験することであり、詩を作ることは、後世の読者に自己の生き方を提示し導くことであるなら、作者の生き方が影響して、初めて読者の心に作者が生き続けることになる。名詩ならば、時代を問わずいつでも永遠に繰

り返し再生される。陸游が国を思い涙した哀感と、一生を貫いた不変の愛情は、この詩を学ぶすべての人の心の中に、再結晶して今の時代を生きることになる。

以上見てきたように、陸游の詩は、陶潜や杜甫などの他の詩からの影響も見受けられるが、曹植や曹丕の詩文からも深い影響を受けていると言える。

注

(1) 『劍南詩稿校注二』（陸游、錢仲聯校注、上海古籍出版社、二〇〇五年四月、二三二頁）。以下引用した陸游詩は、この資料による。

(2) 『曹植集校注』（曹植、趙幼文校注、明文書局、一九八五年四月、三八二頁）。以下引用した曹植の詩文は、この資料による。

(3) 二十句目の「凌」と二十五句目の「編」は、『曹植集校注』では、それぞれ「陵」と「在」になっているが、『文選』（蕭統編、李善注、中華書局出版、一九七七年十一月、三九二頁）によって校勘した。

(4) 『魏文帝集全譯』（曹丕、易健賢訳注、貴州人民出版社、一九九八年十二月、四五六頁）。但し「何鬱鬱」の句は、この資料では「何郁郁」となっているが『先秦漢魏晉南北朝詩』（遼欽立輯校、一九八三年九月、四〇〇頁）によって校勘した。

(5) 『中原中也全集 第一卷』（中原中也、角川書店、一九六

七年十月、二六〇頁）。

(6) 『杜詩詳註』（杜甫撰、仇兆鼯詳註、上海古籍出版社、一九九二年十一月、六十一頁）。以下引用した杜甫詩は、この資料による。

(7) 『陶淵明集箋注』（袁行霈撰、中華書局出版、二〇〇三年四月、二四七頁）。以下引用した陶潜の詩文は、この資料による。

（うえの ひろと・本学修了）